

小学校英語導入は5、6年生からでよいのか

外国語教育の刷新を求めて

伊藤克敏

神奈川大学名誉教授

日本児童英語教育学会（JASTEC）元会長

やっと小学校に外国語（英語）が導入されることになったことは喜ばしいことではある。しかし、5、6年次からの導入には落胆を禁じ得ない。

文部科学省としては、小学校英語導入への賛成派と反対派の両方に顔を立てるための苦肉の策としての決定であろうが、「何故5年生からか」という論拠ある説明がなされていないのは誠に残念である。まず、結論から先にいうと、小学校5、6年生からでは中学生から英語を始めるのと、殆ど変わらない、ということである。

その理由を主としてことばや心理の発達過程、海外の外国語教育導入状況、それに小学校の先生方の開始時期に対する反応と実態などの視点から考察してみたい。

早期外国語教育の源流であるカナダの事情から考察を始めることにしよう。ケベック州では英語とフランス語を話す民族が相互理解をし合って、生活して行くためにはお互いに円滑なコミュニケーションを図ることが肝要である。ところが、従来のような外国語教育ではお互いに満足にコミュニケーションできるような第2言語能力を身につけることができないということで、脳生理学者や教育心理学者の協力を得て、抜本的な改革に乗り出したのである。その結果、「母語の骨格が出来上がり、言語習得能力が旺盛な4歳から8歳ころまで開始年令を下げる必要がある」との進言がなされ、幼稚園や小学校低学年からの外国語が導入され、効果を上げている。こういった早期外国語教育は米国初め、オーストラリア、ヨーロッパ、最近では韓国、中国台湾といった近隣諸国でも実施されている。このことについては後で触れる。

早期外国語教育の必要性や効果については脳や心理の発達面からも指摘されている。発達心理学で「9歳の壁」ということが問題になる。8歳を境に学習や習得方略が変わる、ということである。8歳頃まではことばを具体的な場面を通して「直感的」「全体的」に捉える能力が高く、9歳以後は「論理的」「分析的」志向が強くなる。従って、音声中心の対話型学習は8歳頃までで、徐々にことばや物事を論理的、分析的に捉える傾向が強くなって来る。音声の習得には歌やゲームなどによる繰り返し中心の学習が必要であるが、9歳（4年生）頃からそういった単純な学習には抵抗を感じるようになる。

このことは或る研究所が小学校の現場の先生方を対象に行った調査からも明らかである。「1、2年生は繰り返しが好きです。しかし、歌やチャンツで引き付けられるのは低学年からせいぜい3、4年生までです。高学年になると難しくなります。」「特に低学年は恥

ずかしがらないで間違えも気にせずゲームや歌など生き生きと活動しています。6年生は、とても恥ずかしがってしゃべる自信も無かったため、授業をやるのは大変でした。」従って、5, 6年生の児童に身近なコミュニケーション場面を音声中心に指導し、コミュニケーションの素地を育成することができるのかは疑問である。英語を教えている約半数の先生は開始年齢は1年生からが望ましい、としている。

ことばの習得には順序があり、まず、音声能力をしっかりと身に付けることが大切である。音声中心の言語活動は低学年から始め、音声能力をしっかりとつけておき、中・高学年ではどちらかという、音声よりも文の仕組みやまとまったストーリーに興味が移って行く。発達心理学の最近の研究で、母語習得と外国語習得とも同じ脳の領域が関わり、習得過程も酷似していることが明らかにされている。母語習得に於いて、音声面では文の枠である音調が全体的に習得され、個々の音はやさしい音から徐々に習得して行く。例えば、l とか r といった音は英語を母語としない外国人にとってだけでなく、英語を母語とする子どもにとっても難しく、3~5歳頃に成らないと、完全に習得されないのである。しかし、発話の枠である音調(イントネーション)は先に習得される。外国語教育の専門家は、イントネーションさえしっかりと身につけていれば、個々の音の発音が少々間違ってもコミュニケーションには差し支えない、という研究結果を発表している。

では、その音調をどのように身につけたらよいのであろう。それは、聴覚能力の鋭敏な時期に歌とか、チャンツなどで繰り返し英語の音を聞き、それを模倣することである。こういった学習作業を飽きずにできるのはすでに述べたように、低学年児で、中・高学年になると抵抗を感じ、困難になる。そして、多くの脳神経学者が指摘するように、聴覚能力は6~8歳頃までが最も鋭敏で、その後は徐々に低下するといわれる。筆者は歌やチャンツで小学校の低学年児が見事に英語の音調や音声を獲得し、基本的な会話力を身につけ、英語力の高い高校生と会話する能力を身につけたケースを目撃している。

歌とかゲームを通した対話中心の言語活動で、まず、低学年でしっかりした音声能力を身につけることによって、中・高学年の書きことばに重点をおいた言語活動への足固めができるのである。

きちんとした音を発音する能力を身につけるには、まず、学習言語の音をじっくりと聞き、聴能力をつけることである。外国でその言語を第2言語または外国語として習得する子どもの場合、最初の数週間はもっぱら聞くことに専念し、日常の決まり文句以外は発話しないいわゆる「沈黙の期間」を経験することが指摘されている。聴覚能力と発音能力を司る神経は脳の中で直結しており、音に敏感な時期に外国語の音を充分聞くことによって、しっかりした聴能力と発音能力とを身につけることができるのである。数年前、韓国ソウル市内の小学校低学年の英語教室を参観させてもらったが、視聴覚教材を多用して、低学年生にネイティブの発音をたっぷり聞かせ、歌などで音声練習をしていた。文部科省は「CD, DVDなど視聴覚教材を積極的に利用する」としているが、中・高学年児が単純な音声練習にどれほど積極的に参加するか、疑問である。

「英語による日常会話はなんとかできるが、TVとかネイティブの発するスピードのある英語の理解ができない」ということを耳にする。『英語オンチが国を亡ぼす』という著書の中で、米国に留学し、大企業の米国支社長を務められた寺沢芳男氏は「会議中での米国人の発言がどうしても聞き取れない時がある」と嘆き、「耳から覚える英語教育を小学校から始めるべきだ」と述べている。「英語は何とか発音できるが、聞き取れない」という悩みは多くの人を経験することではなからうか。米国での最近の第2言語習得研究で音声に対する「敏感期」は4～6, 7歳頃までであることが明らかにされている。従って、聴覚能力が鋭敏な低学年に、発音能力の基本をしっかりと身につけておくことが肝要ということになる。そういった音声能力の上に豊かな文字能力の花が咲くのである。これが言語習得の鉄則である。

初代米国大使のライシャワー氏も The Japanese Today(1988)の中で効果的な英語教育の切り札として幼稚園、小学校からの英語教育開始を提案し、「幼稚園や小学校で歌やゲームによって子どもは英語を楽しく学び、視聴覚教材の活用で日本人にとって困難な発音能力の獲得を可能にするであろう」と述べている。

幼稚園、小学校低学年からの外国語導入の必要性にはもう一つの理由がある。在外児童と帰国児童約 1,000 人を対象に行った調査を踏まえ、箕浦康子氏は『子どもの異文化体験』(思索社)の中で、発達心理学からの知見を援用しながら児童の外国語並びに異文化間能力に関する考察を行っている。それによると、9歳から15歳までの間に「情動面、認知面、行動面」において文化的アイデンティティが形成され、「文化心理的枠組み」が形成されると、異質な言語や文化に対して違和感を持つようになる、というのである。2言語教育の盛んなカナダでの長年の研究で、低年齢から第2言語の習得を始めた児童は異文化や異民族に対して「受容的」態度を持っている、とする研究結果と符合する。8歳以前から外国語に触れさせることは基礎である音声能力だけでなく、健全な異文化・異民族観を身につけるためにも重要なことである。

児童発達心理や言語習得過程の基本原則をしっかりと見据え、早急に外国語教育の開始年齢の見直しをすべきである。

1997年に小学校3年生から全国の小学校で英語を導入した韓国は、2008年には開始学年を1年生に下げている。2012年から、小学校から高校まで、英語の授業を英語でやれるようにするという、力の入れ様である。また、2001年に小学校5年から英語を導入していた台湾は2005年には開始学年を3年生に下げている。東南アジアでも、小学校低学年から英語を導入している国は増えている。カナダや欧米では幼稚園から外国語を教えているところも少なくない。

また、ブレア元英国首相は外国語教育に熱を入れ、2012年までに、7歳以上の全ての児童に外国語を必修として学習させる方針を打ち出している。アメリカでも、2006年にブッシュ大統領は「国家安全保障言語構想」を発表し、幼稚園から大学院まで外国語教育を一層強化する必要性を訴えている。EUでも英語を国際共通語として早期から近隣国語と

合わせて学習させるという言語教育政策を取っている。

第一外国語である英語の音声と文字能力の基礎を小学校でしっかりと身に付けることによって、中学・高校でのより高度の英語力を身に付けることができると同時に、第二、第三外国語習得への効果的な動機づけとなろう。上述した発達心理学の知見や世界各国における国際化時代に対応した積極的な外国語教育政策に照らし合わせて見て、開始年齢も含め、我が国の外国語教育をどのように刷新して行ったらよいかを今こそ真剣に考えるべきである。